

自閉症者のソーシャルアメニティの獲得における ルール従事行動に対する強化手続きの効果の検討.

Using a reinforcement of rule-following to establish social amenities for adolescents and adults with autism.

○山本 真也

(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究)

井澤 信三

(兵庫教育大学大学院)

KEY WORDS: 自閉症、ソーシャルアメニティ、ルール支配行動

I. 目的

本研究の目的は、自閉症者に対するルール従事行動の強化の就労場面におけるソーシャルアメニティの獲得に与える有効性を検討することだった。

II. 方法

1. 対象者

本研究には 9 名の自閉症者が参加した。彼らのうち、8 名は男性で、1 名は女性だった。彼らの年齢の幅は 15 歳から 21 歳であり、平均年齢は 18.1 歳だった。対象者は全員、研究開始前、他者に話しかける際に「すみません」などの声かけを行わずに突然要件を伝えるという問題を持っていた。また、他者との会話が終わった後、用事が済んだら「ありがとうございます」や「失礼します」などの言葉を言わずに、すぐにその場を立ち去るという様子が見られた。

2. 従属変数

従属変数は、2 つのソーシャルアメニティの 1 セッションにおける正反応率であった。それらのソーシャルアメニティは、「他者に話しかける際に”今、お時間よろしいですか”と言うこと」と「他者のそばから去る際に”失礼します”と言うこと」だった。“今、お時間よろしいですか”については、対象者が他者に話しかける時に、要件を言う前に、“今、お時間よろしいですか”と言うことができれば、正反応であるとした。“失礼します”については、要件が終わった後、その場を立ち去る前に、“失礼します”と言うことができれば正反応であるとした。

3. セッティングとマテリアル

本研究は 16m×7.5m の部屋の中で行われた。この部屋には 4 脚の長机が置かれた。これらの机は互いに向かい合って置かれた。2 脚の椅子が机 1 脚ごとに置かれた。組み立てられていない封筒の束、封筒の組み立て方法を説明したマニュアル、のり、鉛筆、消しゴム、はさみ、メモ帳がそれぞれの机の上に置かれた。

本研究では、対象者にルールを提示するため、また、ルール従事行動を強化するためにルールシートを用いた。ルールシートには、ソーシャルアメニティの行い方とその前後に行なうべき反応が記載された。また、各反応の隣には空白の正方形も記載された。

4. 手続き

1) ベースライン (BL)

対象者は実験者から介入についての説明を受けた。実験者は対象者に、ここを職場とみなすことを求めた。また、実験者は対象者に、15 分間封筒の組み立て作業を行うこと、もし誰かが自分に何かを求めてきたら自分が最も良いと思うことをすることを伝えた。その後実験者は、仕事の上司役や同僚役を演じた役者も介入に参加することを伝えた。

上司役、あるいは同僚役を演じた役者は、対象者にソーシャルアメニティの遂行機会を提示した。例えば、同僚役は対象者に対して、上司に何らかの連絡を行うように伝えた。対象者の正反応・誤反応にかかわらず、プロンプトやフィードバックを提示しなかった。1 セッションに提示さ

れる遂行機会の回数は、「今、お時間よろしいですか」は 4 回、「ありがとうございます」は 6 回だった。

2) トレーニング

基本的な手続きはプレテストと同様だった。ただし、トレーニングでは、対象者がソーシャルアメニティの遂行機会を提示される直前に、トレーナーはルールシートを提示した。また、ソーシャルアメニティを遂行した後、トレーナーは、対象者が正反応を示したら、ルールシートの正方形の欄に丸印を、誤反応を示したら、三角印とアドバイスを記入した。記入した後、ルールシートを対象者に渡した。上司役と同僚役の反応は BL と一切変わらなかった。

3) プローブ

BL と同様の手続きであった。

III. 結果

本研究に参加した 3 名の結果を Fig. 1 に示した。対象者は全員、BL ではほとんどソーシャルアメニティを自発しなかった。トレーニング開始後、B と C は即座にソーシャルアメニティを自発するようになった。A は第 7 セッションにおいて二つのソーシャルアメニティの正反応率が 100% に達した。プローブにおける正反応率は全てのセッションにおいて 100% だった。

IV. 考察

本研究の結果、ルール従事行動に対する強化はソーシャルアメニティの獲得に有効であることが示された。特に、B と C はトレーニング開始後すぐに 100% の正反応率を示したことからすでに十分なルール従事行動を自発できたと考えられた。また、A の正反応率は漸次的に上昇したことから、A のルール従事行動は本研究において強化され、獲得されたと考えられる。

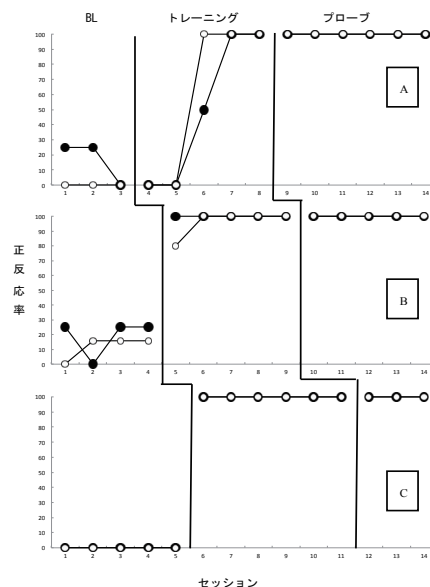


Fig. 1 ソーシャルアメニティの正反応率

黒丸は「今、お時間よろしいですか」、白丸は「失礼します」の正反応率を示した。(Shinya Yamamoto & Shinzo Isawa)